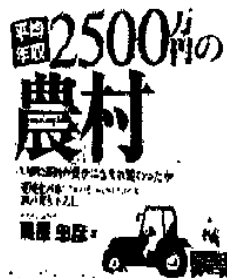


平均年収2500万円の農村

藤原 忠彦・著



行政の首長たる者、一度は自分の思い描く村や町をつくってみたいと思つたらう。さまざまなる事情で、その思いを表現できなかった首長は少ない。だが、著者は役職職官時代から日本一の「レタス王国」づくりにかかわるなど、自分のロマンを実現させた首長の一人といえる。

当地は長野県川上村。村の標高は1270mで、かつては寒村といわれてきた。だが、この逆境をばねに村長は奮闘した。本書はこの軌跡をまとめた。

村の経済を支えるのは農業。607戸余りの高原野菜農家の平均収入は2500万円を超える。農業で高収入は得られないという風潮を吹き飛ばし、嫁不足はなし、農業専従者の平均年齢は52歳。こんな村があったのか、と驚く。

このほか、路線バスとスクールバスを併用するため、運輸省

山村振興へ村長が奮闘

と文部省に夜討ち朝駆けで説得して村営バスを運行したこと。身分証明書と夜間通用口を設けて24時間オープン図書館を設けたこと。地元の方ラマツ材を使って中学校を建設したこと。いずれも村長のアイデアと情熱が伝わってくる。

村民5000人弱で、小さな自治体だからできたと思うかもしれない。しかし、著者の強調するのは「行政の哲学」である。「地方を元気にするためには、行政がそれぞれの哲学を持って知恵を働かせること、つまり国の制度を上手に活用して住民のためによりよい施策を立案・実行していくことが必要」。立派な施設を造り、利用されずに、負担だけを住民に押し付ける市町村とは異なる。

住民のニーズと、これを実現するため立案・実行する首長のロマン。財政赤字、過疎化などに悩む各地の首長は、夢と明るさを照ける一冊だ。

【評者】日野原 信雄

(農政経済部)

03(3505)8671、四六判、162頁、1575円。
ふじわら・ただひこ 1938年、長野県川上村生まれ。川上村企画課長を経て88年、村長に就任。現町村務理事など。6期目。全国在会。